北朝鮮脱出記

草野道子さん

とりあえず山へ

八月十三日午前三時半、近所のガヤガヤという声で目がさめる。
「何時？」と聞くと、
「ロスケが上陸してくるから逃げる。」とのこと。
慌ただしく準備して真暗闇の中を山へ逃げる。
夜が白んできても港が静かなので、他の人々につられ叔母と私は家に戻ってみる。頼みの郵便局も米屋も閉店。仕方なく歩いていると突然、ヒューッヒューッと膝のあたりを弾がかすめる。家でおにぎりを作っていた叔母と急いで山に戻る。
昨日、日赤を退院したばかりの病弱な母、弟二人と五人での避難である。父は六月末応召(オウショウ)で、釜山で終戦になり、三十八度線以北に行けず、復員後、家族の消息を得るために、舞鶴引揚援護局に勤務していた。

運命の岐路

さらに奥地へと古茂山(コモザン)まで歩く。駅の軒下で夜を明かし、無蓋車(ムガイシャ)で茂山(モザン)山着。長時間の停車に汽車から降りて炊事する人がふえ、それならと私達も全員が降りて、豆満江(トマンコウ)の水でご飯を炊いている最中、急に汽車が動き出し、取り残されてしまった。南鮮(ナンセン)行きの最後の便と、あとで聞いた。
翌朝、無蓋車に載れたが白岩(ハクガン)で降ろされる。爆撃が始まる。急いで貨車の下にもぐり込む。機関車に無数の弾痕。
二～三日して、
「日本は負けた。戦争は終わった。」と知る。もう内地へ帰るしかない。翌早朝、無蓋車で出発。吉州(キッシュウ)駅で，ロシア軍戦車からの発砲で機関車をやられ、城津(ジョウシン)に向かって歩く途中、高周波の社宅前で若いロスケに銃を向けられ、居合わせた十人程くやしいけど降参する。
暑い中を他の水を飲み、畑から胡瓜をちぎり喉をうるおす。城津では丸腰の日本兵が、背嚢(ハイノウ)姿で四列の長い長い縦列で、北に向かって歩いて行くのを見送る。列の中から我々同胞に、干しメンタイを投げ与える光景を何度か見た。自分達も困るのに･･･。
城津―興南(コウナン)は無蓋車。興南―咸興(カンコウ)は初めて客車だった。

再び、好機を逃す

九月上旬だったろうか、日本人世話会の指図で、元遊郭『雀の宿』に落ち着く。四畳半に十三人だった。ここで私から順に発疹チフスにかかり、後の人程重症だった。
近くの市場で、早朝キャベツの外葉やタクタンの葉（？たくわんの切れ端）をもらい飢えをしのぐ。大福餅やお握りの立売りもした。一個五銭。
ここで、父のいた鏡城(キョウジョウ)中学卒業生の目にとまり、一人ずつ南鮮に送り届けてくれる事になった。先ず叔母が唖(オシ)の朝鮮娘になり出発。私も洋服屋の子守りに住み込み、名はドウジャー、洋服も作ってくれ、奥さん共々

可愛がってくれたが、移動命令のため長くは居られなかった。叔母は無事京城(ケイジョウ)に着いたが、連絡が取れないため、長期間待ちながら京城へ滞在したが、帰国した。

富坪(フーヒョウ)へ移住

昭和二十年十二月二日、咸興市内の各地の収容所などにちらばっていた満州、北鮮の避難民の一部は、移動命令により、咸興駅前に集合した。約三千三百人。私も若い洋服屋に子守りで住みこんでいたが、ご前中に連絡があり、元遊郭『雀の宿』にいた母、弟二人と共に、午後、列の後に並んだ。

前列の手続きのすんだ人から順に、殆どが、無蓋車にぎゅうぎゅう詰めに乗せられ、途中では時々みぞれが降る寒い中を、一時間ほど走って四時過ぎ、富坪の駅に着いた。雨はやんでいた。目的地までは十分間程の道のりだが、僅かながらも、一切の身の回り品を持っているので、思うように進めない。元気な人達から、目ざす収容所に急ぎ、よいと思われる場所を確保していった。

私達母と子は、長い列の末尾の方で、たどりついた時は、殆どの部屋がすでに満員で、四人がはいりこめそうな余地を見出せぬまま、とうとう北のはずれの小さな小屋、馬小屋に落ち着くことになった。ここは元日本陸軍の演習廠舎(ショウシャ)で、終戦後、一時日本軍の捕虜収容所として使用され、その時に板壁ははがされ、窓も戸もないトタン張りのひどく荒れた粗末なバラックだった。

僅かな荷物をおろし、ほっとしたところへ更におくれて、青色の着物を着たやせて背が高い上品な方と、母親によく似た細面の姉、弟、妹の四人家族が来て、空いていた入り口の近くそばに荷をおろした。

富坪でのくらし

これから帰国までの間の仮住まいだが、少しでも寒さを防ごうと、それぞれ近くの農家から筵(ムシロ)を二枚十円で求め板張りに敷き、一枚は掛け布団にして四人が寝た。窓も戸も、その近くの人が筵で防いだ。

翌日から、薪拾い、ご飯炊きだが、十二月のこと、北風の吹く屋外では焚けないので、皆、家の中に石でくどを作り、火を燃やすので小屋の中は煙が充満し、とても目が痛かった。煙は部屋一ぱいで床から五センチ以上はもうもうとしていた。配給の豆カスばかりのご飯で、大人達は「これは動物の飼料だったのに」といいながら食べていた。

私は同じ小屋の人と、一つ先の町「新上(シンジョウ)」まで、副食を買いに行った事が二・三回あった。雪道を歩き、塩や干物、野菜を買ってきたのだろう。一日がかりだった。

月日を重ねると、持ち金が開くなり、駅前当たりの部落に、夕飯時に飯ごうを持ってご飯を乞うて回った。それをお粥にして二食分にしていた。

そのうち、母は近くの農家に毛糸編物をしに泊り込み、私も遠い農家に短期間ずつ住み込んで精米の手伝いをした。米つきは根気のいる仕事だった。白くなったようでも、まだまだつかねばならなかった。

地下に眠る犠牲者

咸興から具合の悪いまま来た人達に始まり、毎日沢山の人が、寒さと飢えに加えた発疹チフスや、ロシアの風土病再帰熱(サイキネツ)で、数日間横になっていると思うと亡くなっていた。一日に三十人も四十人もの死者で葬り

きれず、演習用の古い塹壕を掘り広げ、巾二米、深さ一・五米程にし、莚に巻いて荒縄で梱包した巨大な冷凍新巻きを壕のそこから順に重ねていった。すきまには子供の新巻きをつめ、いっぱいにならないと土をかぶせなかった。このためだろう、死体の金歯が荒らされていると耳にしたことがある。私の家族は咸興で発疹チフスにかかったので、富坪では幸いしたと思われる。

伐採作業

一月下旬から演習林の伐採作業がはじまり、元気な人は材木運搬の仕事をした。切り口の大小で賃金が支払われる。私も体に応じた直径二・三寸の材木を横長に背負い、一本につき三円位、一日に何回か往復した。材木がなくなると松の小枝を束ねたもの、これは安かった。仕事がだんだん山奥になり道のりも遠くなった。やめる人もふえたが、やめられない。炭俵もかついだが、雪をかぶりぬれた炭俵はとても重く、途中でたまらず休憩したら立ち上がれなくて困った。皆くだってしまって、誰も通らない山道で膝をつき、満身の力を込めて立ち上がれたが、この時初めて目から火が出たのを憶えている。無理がたたったのか、その後発熱して起きられなくなったが、幸い注射で回復した。山で働いた分は全部注射代になったかも知れない。

安藤先生の御家族のこと

最後に来られた方は、清津(セイシン)高女の安藤先生の御家族とあとでわかった。入り口は人の出入りが激しく、厳寒期の開閉の度に身は冷えたと思う。

奥様が、小さいお嬢さんが泣くので、抱いて炊事をしていたように思う。「ヒロシ」と呼ばれた男の子がよく働いて、薪とりなどしていたようだった。数日して女の子が泣かなくなった。やはり寒さと飢えだったと思う。どの家庭も近親者は泣く元気もなく放心状態で、使役の人が始末をしてくれるのを茫然と見ている感じだった。

医者も薬も滋養豊富な食物もない、吹きさらしの荒れた馬小屋に住んでいたら、死んでもおかしくない状態だった。男の子も次第にやせて、手や足は枝の上に皮膚がはってあるような風にみえた。元気なく座ったり横になったりしていたが、ある日気づいた時は、もうここの住人ではなかった。

母親と姉の二人だけになり、ゆっくり手足を伸ばして休めるように場所が広くなっていた。姉の方も空腹をうったえるのであろう。母親が困っていたようだ。それから後、住み込みの働きから帰った時は、もう入り口の人はいなかった。母親は亡くなり、姉は孤児収容所に移されたとのことだった。

夜トイレに起きた時外に出ると、空には星がまたたき北の方角からは燐(リン)が沢山燃えていたのをみた。こわいけどきれいだった。

春来たる

四月上旬だろうか、北風吹き荒れる山野にも、明るい日ざしがふりそそぐようになると、色々の植物が芽を出しはじめた。青野菜に飢えていた私達は、小さな草まで根こそぎ取った。タンポポの根の長かったこと、オオバコの根の多かったこと。スイバ、ノビル、アカザなど、ゆでたり、おもゆに入れたりして食べた。増配の米は節約して売り、副食物にかえたのである。米を鉄カブトで粉にし、ゆでたヨモギとまぜて作った団子はとてもおいしかった。

二月末には帰れる。三月はじめには帰れるというデマに帰国の望みをつないで生きていたが、いつ帰国できるかわからないし、暖かくなったので、帰りたい一心から、同室の人達と脱出を決意する。

脱出に成功

第一団が脱出した後、バーン、バーンと銃声を聞いたが、戻ってきた気配はなかった。

数日後、歩けそうな家族が話し合って未明に出発した。絶対に声を出すな。前の人にしっかり付いて行くように。と命令され、守らなければ大変だし、しかも家族は離れないように、緊張して出発する。

夜中に雪が凍てつき、踏めばバリバリと音がするので、気付かれるのではないかとハラハラしながら、急いで歩く。鉄条網をくぐり抜ける。保安隊の銃が、今鳴るか、今鳴るかと心臓の高鳴りを覚えながら、ひたすら歩く。

どうやら無事に逃げることが出来たと、ホッとしていると、ロスケが三十名位輪になり、キャンプの火を囲んでいた。ギクッとする。下を向いて急ぎ足で、前の人について歩くだけ。ロスケは、もう見なれているのか、我々には無関心だった。よかったと、胸をなでおろす。

昼は歩き、夜は、民家の軒下や、倉庫等に体を横たえ、午後や夕方に川があれば、そこで夕食を作り、野宿をしたりして、四日程で元山(ゲンザン)に着く。

ここでは、大きなお寺で数日間を過ごした。沢山の避難民がいて、それぞれかまどを築き食事を作った。夜露を受けずに寝られるのはありがたかった。

元山から行ける所までの切符を買い、朝鮮人と一緒に乗ったが、三紡(サンボウ)の駅で停車中、満員のため一寸降りたすきに、予告なしに発車して、荷物は網棚に網だなに載せたまま乗れなかった避難民がいた。列車は山中をのろのろと走った揚句、駅でないところに停車して、

「日本人は降りろ!」と言われ、やむなく降りた。

又、僅かの荷を背負って、

昼は歩き、夜は綿のように疲れて眠り、南へ南へと進む。

三十八度線

鉄原(テツゲン)を通り、連川(レンセン)を過ぎた頃から、人目をさけて山道に入り込む。同時に出発した人達とは、年齢、体調等違うので、いつの間にか知らない人達と歩いている。しかし、皆思いは同じ、黙々と歩き、追い越される。

村人や、通行人に道を聞きながら、やっと、広い川岸にたどり着く。南・北鮮の境界を分ける大河である。先着が大勢いて、百人程の集団になっていた。

舟賃の交渉で時間をとり、結局お金のある人が舟賃を払って先に乗り、ない人は最後に乗せてもらう事になった。いつ保安隊が来て発砲するかわからないので、黙々と行動する。川幅は広く、川底の砂が透き通って見えたが、相当深かったと思う。音もなくゆったりと流れ、運河のようであった。

舟から降りた所は南鮮である。もう大丈夫とは思いながらも、弾が怖くて急いで川岸を離れた。

最初の駅、東豆川(トウドゥセン)に着いたのは、午後三時頃だった。家族が揃うのを待って、DDT を浴び、えんじのビロード張りの客車に乗った。

京城で一泊して釜山へ出た。上陸用舟艇で釜山を離れ、博多へ上陸した。

何が何だかわからないまま、慌ただしく家を飛び出してから、つらい事、かなしい事、ひもじかった事、寒かった事、数多くあったが、家族そろって日本の土を踏めたのは、翌年昭和二十一年五月二十九日であった。